河野仁 （号　桃雲） 陶歴

昭和　7 年（1932 年）　愛媛県に生まれる
昭和 25 年（1950 年）　京焼・清水焼業界にて上絵技法を習う
　　日本画を村山好生先生に師事
昭和 35 年（1960 年）　京都上絵陶磁器展にて知事賞　以後、市長賞各賞を受賞
昭和 59 年度（1984 年度）～平成 28 年度（2016 年度）　京都市産業技術研究所にて技術指導を行う
昭和 61 年（1986 年）　京焼・清水焼展にて大阪通商産業局長賞を受賞
昭和 62 年（1987 年）　京焼・清水焼展にて市長賞を受賞
昭和 61 年（1986 年）　京焼・清水焼伝統工芸士に認定される
平成　6　年（1994 年）　京都市伝統産業技術功労者賞を受賞
平成 11 年（1999 年）　第 41 回色絵陶芸展にて知事賞を受賞
平成 14 年（2002 年）　第 44 回色絵陶芸展にて京都陶磁器協同組合連合会会長賞受賞
平成 17 年（2005 年）　瑞宝単光章の叙勲に浴する
令和　1 年（2019 年）　永眠

家族からみた人物像、職人として仕事に向き合う姿勢

仕事に関しては厳しい一面もありましが、普段触れる時は人当たりが良く、後輩の育成にも力を入れていたようです。

休日は、ほとんど釣りに出かけており、特に鮎釣りの季節を楽しみにしていました。毎晩のようにお酒を妻（久惠）に注意されながら呑んでいました。お酒のことで注意されることも多かった人でしたが、妻ありきの人でした。内助の功という言葉がしっくりくる程、孫の目からみても、妻の存在は大きなものでした。

家族で食卓を囲む時には、戦時中の話、社会について、人づき合いについてなど色々な話をしてくれました。

職人として陶器に向き合う姿勢は、70 年程一貫して真面目に真摯に向き合っていたと感じます。早寝早起きが習慣であり、仕事場に着くと散歩に出かけ、毎日決まった時間に食事を取り、仕事をし、帰宅しました。若い頃は苦労したという話は何度も聞いたものです。